

開放性をもった全学機関としての CJL へ —2017 年度を振り返って—



日本語教育研究センター所長 舘岡 洋子

1. はじめに

早稲田大学日本語教育研究センター（Center for Japanese Language, Waseda University：以下 CJL）は、来年度（2018 年度）設立 30 周年を迎える。早稲田大学においては、1884 年に初の留学生受け入れが、また、1899 年には清国留学生の受け入れが始まり、1905 年には清国留学生部が開設され、以来、日本語教育の長い歴史をもつ。1962 年に開設された語学教育研究所（当時）は日本語教育部門を包摂していたが、そこから日本語教育部門が独立して CJL となったのは 1988 年のことであり、来年度でちょうど 30 年になる。大学の組織としては、CJL は大学院日本語教育研究科（日研）とともに国際学術院に位置づけられてきたが、2011 年に学術院組織を離れて、独立の全学的な教育研究機関となった。つまり、本学における留学生のための日本語の教育を一元的に担うということが組織的にも明確化されたといえよう。CJL の 30 年の歴史の中で、独立の全学機関となってからのこの数年は、増加する留学生の受け入れ機関のひとつとしての CJL の拡大は、大きな特徴としてあげられる。2017 年度を締めくくるにあたり、学習者、プログラム、教育スタッフの観点から現在の CJL の概況をまとめ、これからの方向付けを確認しておきたい。最後に、二度にわたって CJL の所長を務められた吉岡幸英名誉教授が 2017 年 9 月 11 日にご逝去されたことに触れる。

2. CJL で学ぶ学習者たち

CJL の学習者における一番大きな変化は、留学生数の急増である。早稲田大学の留学生数は、2006 年には 2,368 人であったのが、その 10 年後の 2016 年には 5,431 人と 2 倍以上に増え、現在、112 か国 5,622 人（2017 年 11 月）にのぼる。これは、国内で最も多い。2000 年度の留学生数が 1,153 人だったことを考えると、急増といってよいだろう。

現在、全留学生数の半数弱の 2,329 人が CJL で日本語を学んでいる（2017 年度秋学期）。CJL は、全学の日本語教育を一元的に担っているために、全ての学部、大学院の日本語学習を希望する学生が日本語の授業を履修するとともに、1 年または半年の「日本語教育プログラム（Japanese Language Program：以下 JLP）」として学外の学習者にも門戸を開いて

いる。JLPの学生のうち約3割が協定に基づく交換留学生、約7割は私費留学生である。外国人留学生の受け入れは、本学の最重要課題のひとつであり、「Waseda Vision 150」では、2032年には留学生数1万人という数値目標を掲げている。グローバル大学として多くの海外の大学を協定校にもち（協定数496、機関数560：2017年度）、交換留学生数も増加しており、それがJLPの学生増加にも反映されている。

また、国・地域でいうと、多い順に、①中国（34%）、②韓国（13%）、③台湾（11%）、④日本（8%）、⑤アメリカ（8%）となっている（2017年度秋学期）。東アジアからの留学生が多い傾向は変わらないが、近年とくに中国からの留学生が増えてきている。また、日本国籍の日本語学習者というのは、幼少期以降、日本以外の国や地域で育ち日本語を母語としていない学生などで、グローバル化した現代における特徴のひとつといえよう。

数の増加のみでなく、近年の傾向としては、大学内における「英語学位プログラム」の拡大による日本語学習者の質の変化があげられる。「英語学位プログラム」とは、入学から卒業まで英語で学ぶことができる英語による学位取得プログラムのことである。現在、本学では政治経済学部、社会科学部、基幹理工学部、創造理工学部、先進理工学部、国際教養学部、文化構想学部の7つの学部内に英語学位プログラムが設置されており、大学院では17研究科で展開されている。

従来、早稲田大学は日本語レベルの高い留学生が多く、したがってCJLでの開講科目も上級レベルへのニーズが高かった。これは、日本人大学生といっしょに授業に参加できる留学生ということを考えれば当然の傾向である。しかし、近年の英語学位プログラムの拡大により、必ずしも高い日本語能力は必要とされなくなった。だからといって、日本語学習へのニーズがなくなったというわけではない。英語学位プログラムの中には日本語を必修としている学部もあるし、必修ではない学部の学生たちも日本での生活のために日本語履修をするケースは多い。したがって、CJLでは初級の履修者が多くなり、学習者の日本語レベルの構造や日本語学習へのニーズがかつてとは変わってきたといえる。今後、英語学位プログラムの学生たちが日本社会で活躍していくためには、どのような日本語が必要とされるのか、CJLのあり方にもかかわってくる。

3. CJLのプログラム

CJLのプログラムは、総合科目群とテーマ科目群の2本の柱から、また1レベルから8レベルまで（8が高いレベル）の8つのレベルからなる（図1参照）。

総合科目群は、四技能（読む、書く、聞く、話す）をバランスよく学習するための科目群で、常勤教員のほか主にインストラクター（非常勤）が担当している。シラバスがある程度、定められておりCJLのプログラムの安定的な発展に貢献している。

一方、テーマ科目群は、テーマに沿った特色ある学習を提供する科目群で、常勤教員のほか主に非常勤講師が担当している。個性豊かな科目群を揃え、多様な学習目的に対応しCJLのプログラムの特徴となっている。以下、それぞれの科目群について説明を加える。

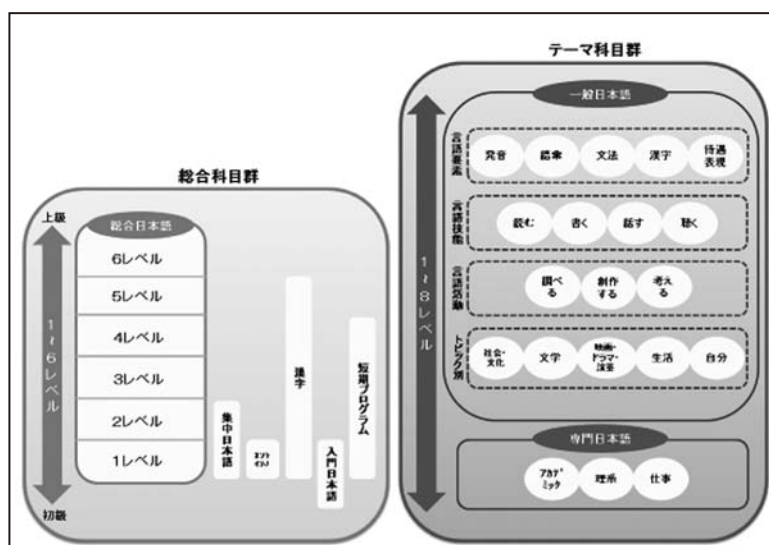


図1 日本語教育研究センター科目構成 (2017年度)

3-1. 総合科目群

「総合科目群」は、「総合日本語」を中心とし、そのほかに必要に応じて設けられた「入門日本語」、「集中日本語 1-2」、「オンライン・ジャパニーズ」、「漢字科目」からなり、2018年度にむけて技能科目も開発中である。上記はいずれも15週間の科目であるが、短期日本語集中プログラムとして3週間あるいは6週間で開講される科目もある。

「総合科目群」の中で中心となる「総合日本語」は、CJLの基幹となる大きなプログラムで、初級から上級前半の学習者（レベル1～6）を対象に、標準化されたシラバスと教材によって展開され、四技能を総合的にバランスよく学習する。表1に見るように、6レベル以外、どのレベルでも履修者数は増えているが、とくに英語学位プログラムの入学者が多い秋学期には、1レベル、2レベルの履修者数が増えている。

表1 総合日本語のレベル別 履修者数の推移

	2013 春	2013 秋	2014 春	2014 秋	2015 春	2015 秋	2016 春	2016 秋	2017 春	2017 秋
総合日本語 1	39	140	40	142	60	150	103	233	90	224
総合日本語 2	105	141	132	161	144	162	175	184	191	212
総合日本語 3	156	193	155	209	179	205	192	220	244	258
総合日本語 4	137	188	196	165	199	187	211	184	251	191
総合日本語 5	136	141	182	166	150	165	144	160	180	188
総合日本語 6	82	70	79	86	72	72	68	71	86	69
計	655	873	784	929	804	941	893	1,052	1,042	1,142

3-2. テーマ科目群

「テーマ科目群」では、初級から超級の学習者（レベル1～8）を対象に、担当教員がそれぞれの専門性を生かした教材・シラバスを策定し、ユニークで「先進性」のある授業を提供している。読む、書く、聞く、話すといった言語技能に特化した科目だけでなく、

俳句や演劇などの創造性豊かなものから、就職や進学などの専門日本語に関する科目など、多様化する留学生の興味関心やニーズに対応した、幅広い分野で科目が展開されている。

2017年度は、テーマ科目群として春学期244科目、秋学期248科目が開講された。また、2017年度は、テーマ科目群のカテゴリー分類を試みた。240を超える多様な科目が開講され、学習者にとってはこの上ない豊かな学習環境ではあるが、一方、違いがわかりにくかったり構造がみえなかったりといった面から、履修選択の際のわかりやすさの点で工夫が必要となっていた。そこで、2017年度は、設置されているテーマ科目を20のキーワードでまとめた(図1)。また、2018年度からは、9つのカテゴリー「口頭表現」「文章表現」「聴解」「読解」「文法」「語彙」「社会と文化」「アカデミック日本語」「ビジネス日本語」に分類して、履修の便宜が図れるようにした。

また、日本語レベルの初級への構造変化を受け、全てのレベル、全てのカテゴリーで新設科目の設置を行うのではなく、学習者のニーズをみて不足するレベル、不足するカテゴリーにおいて科目設置を行っている。

「総合科目群」と「テーマ科目群」というCJLの2本の柱について概略を述べてきたが、こうして両者が異なった特徴を発揮しつつ相乗効果をあげている。総合日本語は週3コマあるいは5コマの開講で、レベルごとに必要なものが盛り込まれており、日本語学習の基盤を支えている。また、バラエティあふれるテーマ科目は、言語要素、言語技能、言語活動の各側面から日本語学習を深めるとともに、日本語学習を社会から切り離された言語の学習とせず、日本文化や多様な専門性と一体化した展開をしている。初級から上級まで広がりをもって多様なテーマに特化したプログラムがあるのは、CJLの大きな特徴である。この部分にこそ他では学ぶことができないCJLの独自性があるのである。

「総合科目群」と「テーマ科目群」という2本の柱によって、CJLの豊かな学習環境は構築されているといえる。次に、この豊かな学習環境を支えるスタッフたちにも言及する。

4. CJLの教育スタッフ

CJLは2016年秋にやっと1人目の専任教員の着任がかない、2018年度春から2人目の専任教員が着任する予定である。長い間、CJLには専任教員が置かれずにきた。独立の「全学機関」としてのCJLになることで、CJLが自律的に発展していくためには、長期的なビジョンで教育を支える教育スタッフが必須である。

2017年度秋学期の時点で教員数は、准教授1名、准教授(任期付)5名、講師(任期付)11名、非常勤講師68名、インストラクター(非常勤)131名となり、日本語教育研究科の教員(兼担)10名を加えると総勢200名を超える。この大所帯の教員たちと学生たちを事務スタッフ14名がサポートしている。この陣容こそがCJLの大きな財産であり、豊かなりソースであり、将来の希望でもある。やや大げさに聞こえるかもしれないが、この教育スタッフたちのあり方、切磋琢磨が早稲田の日本語教育を、ひいては日本全体の日本語教育をけん引していくと考える。

5. 2018 年度に向けて

以上、学習者、プログラム、教育スタッフの観点から、2017 年度の CJL の概況をまとめてきた。大学全体のグローバル化に呼応して、CJL でも学生数の増大、英語学位プログラムの増加などによる日本語学習者の日本語レベルの構造の変化があり、それに応じてテーマ科目群のカテゴリー化や教育スタッフの充実を図ってきた。

2017 年度を振り返る中で、ここで、グローバル化とは何かという古くて新しいテーマに触れざるを得ない。グローバル化とは、もちろん、留学生が増えることでも、授業が英語で行われることでもないことは明らかである。世界のどの地域においても、グローバル化のお陰で、経済的にも政治的にも人々が喜びや幸せを実現できるようになることに反対する人は少ないであろう。だとしたら、グローバルな均一性とローカルな豊かさがバランスをもって果たされなければならない。世界の各地からやってきて早稲田に学びの場を得た留学生たちは、果たしてグローバル化の恩恵を受けているのだろうか。また、留学生たちをクラスメイトとしてともに学んでいる日本人学生たちにもこの影響による豊かな変化が起きているのだろうか。留学生数増大の目標は、まだ達成途上にあるが、途中で振り返ってみることも必要であろう。

全学の教育機関である CJL としても、数の増加にひたすら対応することでなんとかその役割を果たそうとしてきた。しかし、留学生受け入れ機関として全学への発信がどれくらいできたであろうか。たとえば、日本語の習得について考えてみよう。日本語の習得は CJL のみで行えばいいと思われてはいないだろうか。たしかに、CJL は日本語教育に特化した機関である。当然、留学生たちが日本語の習得ができることめざしているし、そのための専門家集団としての教員がいる。しかし、留学生たちの大学生活は CJL だけにとどまるものではない。日本語の授業以外のそれぞれの授業の場で、あるいは授業以外の場で、全学の教職員、学生たちと留学生たちが日本語を使ってコミュニケーションをしながら互いの理解を深め合うプロセスそのものが日本語学習の場でもある。留学生たちが CJL の中に固まってしまうのではなく、キャンパス内のあらゆる場が日本語学習の場となってほしい。そのような場がより多く創出されるグローバル大学であってほしいと願う。

本誌第 4 号（2016 年 3 月発行）の【センター最前線】で、筆者は、CJL は「ことばの学びの中継点」であり、多様性、主体性、開放性をもった機関でありたいといった趣旨のことを述べた。多様性と主体性は CJL の随所で具体的に実現されてきているが、開放性についてはまだ途上にあるといわざるを得ない。英語学位プログラムにかぎらず日本語による従来のプログラムにおいても本学の留学生の割合は高くなってきており、CJL が全学の日本語教育機関として貢献できる部分は大きいと考える。しかし、学内での CJL の認知度は必ずしも高くない。CJL は何をやっている機関なのか、留学生たちはどのように日本語を学んでいるのか、留学生たちにとって日本の大学生活および学業達成の上で何が困難なのか、学内の他箇所の先生方や学生たちによく知っていただくこと、そこから連携を図っていくことが今後さらに必要になると考える。そういった意味で、CJL の開放性は今後、さらに重要な課題となる。

真のグローバル化とは、英語ができる人や多言語が使える人が増えることばかりではな

く、異なった文化や背景をもつ人々が協働して新たな創造をなしえることであろう。留学生自身のためにも、また留学生以外の学生および教職員のためにも、留学生は留学生として隔離された CJL の中にいるのではなく、全学との交流が必須である。2017 年度までの 30 年間は、その礎の時期であり、これからは次のステージにむけて新たな歩みを始めるときが来たのである。

6. おわりに—吉岡英幸先生のご逝去に際して

2017 年は CJL においては、大きなできごとがあった。1998 年からと 2002 年からの 2 度にわたり CJL の所長を務められた吉岡英幸先生が 2017 年 9 月 11 日にご逝去されたのである。吉岡先生は、1968 年から早稲田大学の国際部、1973 年からは語学研究所（語研）に非常勤で勤務され、1990 年には日本語研究教育センター（当時）に着任され、2013 年の定年によるご退職まで、長きにわたり早稲田の日本語教育に携わってこられた。2001 年の大学院日本語教育研究科設立時には、初代研究科長となり、日本語研究教育センターの所長を兼務され、文字通り早稲田の日本語教育の第一人者として重責を担ってこられた。CJL では、聴解指導など実践的な科目を開講され、留学生教育の現場で自ら実践を重ねて行かれました。所長として多くの教職員たちから信頼され全学のセンターとしての位置づけを確かなものにしていった。日本語教育研究者としての吉岡先生に関しては、本号のインタビュー記事も併せてお読みいただきたい。筆者も大変お世話になったことを感謝とともに記しておきたい。

日頃からスポーツマンでいらっしゃり、ご逝去された日の数日前にもテニスをなさっていたと聞いている。お元気だっただけに、訃報を聞いた者はみんな驚き悲しんだ。誰に対しても暖かな心配りをしてくださる先生のそばにいとみんなが和やかな雰囲気になってくるのは、先生のお人柄ゆえのことだといつも思う。

早稲田の日本語教育に生涯をかけてくださった吉岡先生のご恩に報いるためにも、CJL が豊かな学びの場であり続けるよう努力していきたい。きっと吉岡先生も喜んで応援してくださるにちがいない。

（たておか ようこ、早稲田大学国際学術院）